国際交流の大恩人・馬興国先生
―神奈川大学は先生のご功績を永遠に忘れません―

中島三千男（元学長）

馬先生の体調が良くないと知ったのは昨年（二〇一七年）の初春のことであった。久しぶりにメールをいただいて横浜でお会いした。その時に初めて体調がすぐれない事を聞いたが、その時はそんなに切羽詰った話ではないと少し軽く考えていた。

ところが五月の連休明けに、今度は電話で会いたいとの連絡があった。声からもただならぬ様子が窺えた。すぐにまた横浜でお会いしたが、この時に初めて馬先生の深刻な病状を聞き、薬（新薬）の関係で二か月ほど中国で療養したい事、国際交流関係の仕事も中国で療養しながら出来るが特別招聘教授の身分はどうなるのか等の相談であった。

私はすぐに小林孝吉常務理事に連絡を取り、きちんと学内の事務手続きを踏めば、今の身分のまま中国での長期の療養は可能だという判断をいただいたので、馬先生にすぐに中国に行く事、またそのために正式な学内手続きを速やかに取ることを奨めた。馬先生は直ちに手続きを行い、教学（学長）サイドでも迅速な対応をされ、六月から中国（瀋陽）での療養が始まった。

当初の判断では、二か月ということであったが、七月末にもう二か月の治療休暇を申請しそれが許可された旨のメールをいただいた。それ以降、私は一度中国にお見舞いに行かなければとタイミングを計っていたが、一〇月二二日孫安石先生から馬先生の急逝を伝えられた。無念!!

私が馬先生と初めて出会ったのは一九九七年四月、先生が中国における著名な日本（文化）研究・民俗学研究者として来日され、私も所員であった神奈川大学日本常民文化研究所の特別研究員として一年間、日本民俗学研究の第一人者であった故宮田登教授の下で研究された時である。その後も何かと連絡をとりあい、私の海外神社調査の通訳をお世話いただいたりするなどプライベートなお付合いを続けてきた。

このプライベートなお付合いという点で特に感謝しているのは、私の中学校時代（現北九州市立菊陵中学校）の恩師故白濱泰雄先生に関わる事である。白濱先生は、一九九五年一一月、享年七一歳で亡くなられたが、国語の教師として長年にわたり教鞭を執られると共に、日本の古典や芸術文化に造詣が深く、また愛書家として多くの蔵書を持っておられた。また、著名な摺師である山田孝三郎師の手になる、江戸時代の浮世絵を多数所蔵されていた。

ある時、奥さまの洋子夫人からその蔵書及び浮世絵の有効活用の方法を相談された。もうその頃は日本の大学や公共図書館で個人の蔵書の引き取りは難しい状況であったので、私は中国での活用を思いつき、当時北九州の九州国際大学に勤めていた馬興国先生に相談した。馬先生はこのアイデアにいたく賛同され、直ちに白濱先生宅を数度訪れるなど持ち前の行動力を発揮、それらを馬先生が副学長をしていた遼寧大学外国語学院に寄贈することとなった。同学院では「白濱文庫」を設置するとともに洋子夫人に栄誉証書を贈った（二〇〇五年九月）。蔵

書には日本での最大規模の国語辞典である小学館の『日本国語大辞典』（全二〇巻）や『日本古典文学全集』（全五一巻）などがあり、日本語、日本文化を学ぶ学生に大いに役立っているとのことである。また浮世絵は瀋陽の日本総領事館や社団法人遼寧省元日本留学生会等を通じて中国各地で巡回展示され、多くの中国人愛好者を生んだ。

こうして故白濱先生の蔵書や浮世絵は日中の教育交流、文化交流に大きな役割を果たし、今日でも洋子夫人は馬先生のこの行いに深く感謝されている。また私にとっても馬先生の御蔭で恩師への万分の一の恩返しができたというものである。

さて、私は二〇〇七年四月に学長に就任したが、その選挙公約の一つの柱に国際交流の抜本的推進、拡充を掲げていた。そして、そのための重要施策として打ち出したのが国際交流を専ら担当する専任教員の採用、そのための特別招聘教員制度の創設である。

もちろん、この特別招聘教員制度の創設は国際交流だけを狙って創設されたものではなく、大学の置かれた環境が激変する中で、大学が果たすべき新しい諸課題に積極的に対応するものであったが、私の初発の意図はまさに神奈川大学の国際交流の飛躍的発展の「切札」として馬興国先生をお招きするための制度設計であった。ただ、この制度は教員の採用は教授会の発議で行うという大学の長年の慣行を破り、学長、理事長（当時は白井宏尚理事長）のイニシャチブで行おうとするものであったが故に議論は白熱した。しかし最終的に全学で承認され、二〇〇八年四月に「神奈川大学特別招聘教員規定」として施行された。それに基づき、二〇〇九年四月馬先生は神奈川大学における「国際化」の推進という特命を帯びた特別招聘教授として本学に赴任された。馬先生は学長提

案の特別招聘教員第一号であった。

馬先生はこの特別招聘教員という制度の重要性・有効性を証明するかのように、精力的に活躍され、神奈川大学の「国際化」に大いに貢献をされた。紙数の関係から私の学長就任時代の六年間（二〇〇七～二〇一三年）のいくつかの例示にとどめるが、一九八〇年前後に始まる神奈川大学の海外交流協定校は、私が学長に就任する二〇〇七年段階ではわずか一八大学であったが、退任する二〇一三年には二一大学が新しく増えて、二倍以上の計三九大学になった。特にこの新しい二一大学の中には馬先生が力を発揮した北京、清華、復旦、浙江大学などいわゆる中国の「名門」大学との協定（更新・再締結も含む）が含まれ、神奈川大学の国際的地位の向上に大きな貢献をなした。

これに伴い、海外からの留学生も私が学長に就任した時は僅か二名という惨憺たる状況であったが、学長を退任する年には四〇名に増えた。もちろんこうしたことは学長事務室や国際交流センターを始め、神奈川大学の法人、事務局の財政面を含めた全面的なバックアップがあって初めて可能なことであり、また私のもとで学長補佐を勤めていた中国語学科の鈴木陽一先生の役割も大きかったわけであるが、何と言っても馬先生の中国における驚くべき「人脈」の広さが果たした役割は突出していた。

さらに学術交流の点でも馬先生は大きな役割を果たした。この点で何と言っても特筆されるのは二〇一一年一一月に本学で開催された国際シンポジウム「辛亥革命一〇〇周年記念シンポジウム―辛亥革命とアジア―」であった。このシンポジウムは特別講演者として程永華中国大使、入江昭ハーバード大学名誉教授を招くと共に、日・中・韓・台湾の研究者による数十本の研究報告が二日間（五～六日）にわたってなされたが、延べ千数百名

を超える聴衆を集め、同年に日本国内各地で開催された辛亥革命一〇〇周年関連の学術シンポジウムの中では群を抜いて最大規模のものになった。

このシンポジウムの成功は内容的には大里浩秋先生を中心に孫先生等中国学科の先生の尽力の賜物であるが、この初発の企画から成功まで裏方として支えたのが馬先生であった。このシンポジウムは清華大学、中国史学会と神奈川大学の三者の共催で開催されたが、中国で高い「ステータス」を持つ清華大学や中国史学会と神奈川大学の共催という形にするにはそれなりの苦労があった。馬先生は神奈川大学の代表として時には強い態度で、時には粘り強い態度でその実現に尽力された。中国人（の研究者）である前に、日本のそして神奈川大学の教員であるという姿勢を最後まで貫かれたことを今でも忘れることは出来ない。

このように、馬先生は私の学長時代、国際交流担当の特別招聘教授として学生間の交流においても、学術交流の面においても神奈川大学の「国際化」に大きな役割を果たしてくれた。私の学長退任後も引き続き馬先生が新しい学長の下で中国との交流活動に励んでいる事は時々本人より報告を受けていたが、このたびの神奈川大学の「中国現地事務所の設置（上海）」という私の学長時代に構想された長年の夢の実現が、馬先生が神奈川大学に残してくれた最後のお仕事となった。

生前に一言私の口から直接に最後の御礼と感謝の言葉を述べたかったがそれが叶わぬ今、記して深甚の謝意を表する次第である。

「神奈川大学は先生のご功績を永遠に忘れません。」